

論文

多文化共生に向かう〈動機付け〉の研究
—ワラビスタンにおける日本人支援者へのインタビュー調査から—
The Motivation toward Multi-cultural Co-existence:
The Perspective of Japanese Supporters of the Turkish Kurd Community in “Warabistan”

片山 奈緒美 (Naomi KATAYAMA)
筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

日本国内は年々多様な背景を持つ在留外国人が増加し、各地に集住地域が存在する。そうした多文化コミュニティの研究においては、稲垣 (2012) が指摘するように、これまでゲスト側である外国人住民がホスト側の日本人社会にいかに対応するかが議論の中心だった。しかし、ゲスト側が集住しているほど、同じ言語や文化を持つ人々が集まって生活していることになり、日本人社会への適応は難しいだろう。

こうした問題を踏まえ、片山 (2020b ほか) は多文化共生社会の実現には、ゲスト側とホスト側の双方の相互理解と継続的コミュニケーションに着目した「わかりあえる日本語」コミュニケーションの構築が必要であり、〈言語コミュニケーション〉、〈接触場面〉、〈動機付け〉の3つの要素が不可欠だと述べた。

多文化共生について論じる際、一般に Berry (1997) が示した〈統合〉型の多文化共生社会が理想的だとされるが、〈統合〉型社会を目指すには、ゲスト側だけではなくホスト側の「文化受容」の問題を避けることはできない。そこで、本研究は「わかりあえる日本語」コミュニケーションの3要素のうち、ホスト側の〈動機付け〉に注目し、埼玉県 JR 蕨駅周辺に集住するトルコ系クルド人を支援する日本人支援者たちにインタビュー調査を行った。得られたデータをライフストーリー研究の手法で記述し、トルコ系クルド人の支援に至った〈動機付け〉を抽出した。さらに支援者たちの〈動機付け〉事例を「異文化感受性発達モデル」(Bennett 1986) の6つのステージに沿って分類し、異文化に対する反応の変化がどのようにして支援というかたちにつながったのかを明らかにしたい。

As the number of foreign residents in Japan with various backgrounds increases, these residents have been creating their own communities throughout the country. In a study of these multicultural communities, Inagaki (2012) points out that the discussion thus far has mainly focused on how these foreign residents as guests can adapt to Japanese society as the host. However, if foreign residents decide to live in their community in Japan, the continued use of their own language and culture hinders their adaptation to Japanese society.

In consideration of these issues, to realize a society with multicultural co-existence, Katayama (2018, 2019, 2020a, 2020b) posits that the following are essential: The establishment of effective communication via mutually understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo) between guests and host. Katayama also emphasizes the importance of the following three factors: establishing communication methods; creating and increasing opportunities for contact between foreign and Japanese residents; and motivating foreign and Japanese residents to make acquaintance with and communicate with each other.

In the debate on multicultural co-existence, the idea of an “integrated” society as proposed by Berry (1997) is generally considered to be the ideal. However, in seeking to achieve this “integrated” society, some degree of “acculturation” cannot be avoided by either the guests or the host.

Therefore, in this study, the author will focus on the motivation for the host. For this purpose, the author interviewed Japanese supporters helping a Turkish Kurd community “Warabistan” near JR Warabi station

in Saitama Prefecture. The obtained data was described by using a life story study method to reveal the motivations that have led these supporters to give assistance to Turkish Kurds. Then these motivations were categorized into six stages according to the Developmental Model of Intercultural Sensitivity introduced by Bennett (1986) to clarify how changes in the supporters' responses to a different culture led to their desire to support this group of foreign residents.

キーワード：動機付け 異文化感受性発達モデル 多文化共生社会 ホスト側

Keywords: Motivation, Developmental Model of Intercultural Sensitivity, Multicultural Co-existence Society, Hosts

はじめに

総務省（2006）の「地域における多文化共生推進プラン」では〈地域における多文化共生の意義〉のひとつとして〈住民の異文化理解力の向上〉をあげている。しかし、実際には多文化環境において「ゲスト側がいかにかにホスト社会に適応すべきかが問題視される議論が中心」（稲垣2012）になりがちであり、ホスト側の問題についての議論が深まっていないのが現状である。

片山（2018、2019、2020a、2020b）はゲスト側とホスト側の相互理解と継続的コミュニケーションに着目した「わかりあえる日本語」コミュニケーションの必要性について述べた。日本国内の多様化する多文化コミュニティで日本語でのコミュニケーションを成立させるには、「やさしい日本語」などの〈言語コミュニケーション〉手段と、行政や地域団体等による〈接触場面〉の形成が必要である。野田（2014）は「やさしい日本語」は母語話者が非母語話者に日本語で話したり書いたりする配慮が求められるとしているが、こうした母語話者側にも非母語話者への配慮という負担が生じる〈言語コミュニケーション〉手段を用いて、異なる背景を持つ住民が〈接触場面〉を持続的に形成するには、〈動機付け〉が欠かせない。これら〈言語コミュニケーション〉〈接触場面〉〈動機付け〉という3要素が揃ったときに生じる継続的で相互理解が進んだ日本語コミュニケーションが「わかりあえる日本語」コミュニケーションである（図1）。

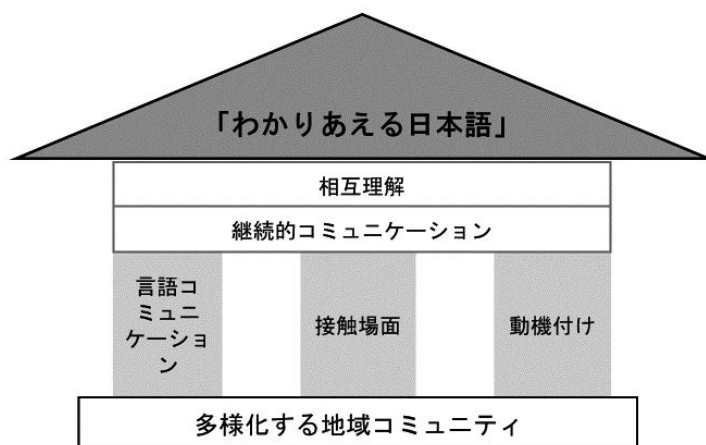


図1 「わかりあえる日本語」のイメージ（片山2020b: 3）

本研究ではこの3要素のうちの〈動機付け〉に注目し、埼玉県JR蕨駅周辺の多文化コミュニティ（通称ワラビスタ）でトルコ系クルド人を支援する日本人ボランティアにインタビューを行った。ひとりの住民が外国人住民を支援する側にまわった動機付けを明らかにすることで、動機付けの観察を多文化共生社会の構築に生かす基礎研究としたい。

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

Berry (1997) は文化移動したゲスト側の「文化受容態度」(Acculturation strategies) について、〈統合〉、〈同化〉、〈分離〉、〈周辺化〉に分類した(表1)。

表1 文化受容態度 (Berry1997:10の図を筆者が翻訳し、作表)

	自文化の特徴や文化的アイデンティティの維持を重視する	自文化の特徴や文化的アイデンティティの維持を重視しない
ホスト側の社会との関係維持を重視する	統合 (Integration)	同化 (Assimilation)
ホスト側の社会との関係維持を重視しない	分離 (Separation/Segregation)	周辺化 (Marginalization)

一般に多文化共生社会を構築するには自文化の特徴や文化的アイデンティティを維持しながら、ホスト側との関係維持を重視する〈統合〉型社会が理想的とされる。だが、Berry は〈統合〉型の多文化社会が実現するには、その地域で文化的多様性が広く認められ、差別や偏見が少なく、異文化間の相互理解がなされることが前提条件になるとしている。この点については Bouchard (2012) も文化的多様性を受け入れることは文化間の関係に折りあいをつけることであり、異文化間においてより不安定な立場にある移民やマイノリティの人々の権利を尊重することが重要だと指摘している。つまり、ホスト側にも文化的多様性を認め、ゲスト側の文化を受容する態度が必要ということになる。

では、近年多様な背景を持つ外国人住民が増加している日本国内において、ホスト側とゲスト側の双方が自文化の特徴や文化的アイデンティティの維持及び両者間関係の維持を重視し、〈統合〉型の多文化共生社会を構築することは可能だろうか。

本研究は多文化共生社会を形成する要素のひとつとして、ゲスト側との関係構築・維持に対するホスト側の態度や実際にとった行動に注目したい。〈統合〉型の多文化共生社会を構築するために、「わかりあえる日本語」コミュニケーションの3要素のうち、ホスト側の〈動機付け〉を明らかにすることで、ゲスト側に対する態度と実際の行動を示すことができるだろう。

(2) 研究の目的

トルコ系クルド人(以下、クルド人)はトルコでの迫害や差別を理由に1990年代から来日し、現在は日本国内に2,000人程度が在留する。そのうち、JR 蕨駅周辺のワラビスタと呼ばれるエリアに血縁関係や村単位で1,500人が集住し、日本国内で最大のクルド人コミュニティを形成している。彼らの多くは日本で難民申請をしているが、2020年6月現在、難民認定された者はいない。そのため、日本の査証を持たない非正規滞在者として入国管理局の施設への収容や仮放免措置を受けながら長期滞在を続ける。仮放免者は就労と移動の制限があり、経済的にも不自由な生活を送っている。

ワラビスタのクルド人は言語能力や経済面の不安などから集住して助けあって生活する。日本人住民との接触場面はきわめて限られており、「はじめに」で述べた「わかりあえる日本語」コミュニケーションが成立しているとは言い難い。そのため、数少ない接触場面が継続して発生することがなく、ワラビスタではクルド人住民と日本人住民間に相互理解の兆しが見られない。

しかし、ワラビスタでクルド人を支援する日本人住民も存在する。ワラビスタは埼玉県川口市と蕨市の市境のエリアであり、双方の行政区にいくつかの支援グループが活動中である。本研究は、ワラビスタのクルド人およそ1,500人の90%が居住するといわれる川口市側で日本人支援者にインタビュー調査を行い、日本人コミュニティの住民がクルド人の支援者になるに至った〈動機付け〉を抽出、分析する。管見の限り、このホスト側の動機付けに関する研究はあまり見られない。

さらに抽出された〈動機付け〉結果について、Bennett (1986) の「異文化感受性発達モデル (DMIS,

A Developmental Model of Intercultural Sensitivity)」を理論的枠組みとして論じる。そして、ワラビスタンにおいてホスト側の構成員が支援者になった〈動機付け〉事例について異文化感受性発達モデルの6つのステージに沿って分類し、異文化に対する反応の変化がどのようにして支援というかたちにつながったのかを明らかにすることを研究目的とする。

2. 先行研究

(1) 動機付け

動機付けは「行動が生起し、維持され、方向づけられるプロセス全般を意味する」(鹿毛2012)とされる。また、しばしば混同される動機 (motives) について上淵 (2012) は「動機づけプロセスを生じさせて持続させる、個体内の要因を総称」とし、動機は動機付けのプロセスの一部だとして区別している (図2)。本稿はこれらの定義に基づいて論ずることとする。

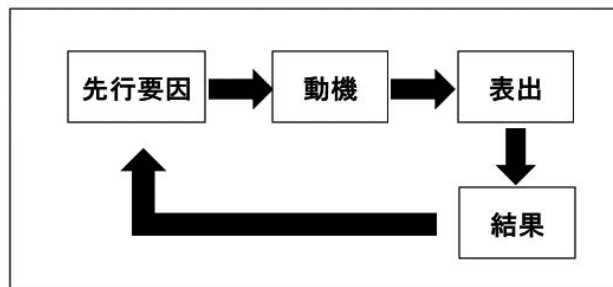


図2 循環的な動機付けのプロセス (上淵2019: 3を基に筆者作成)

図2が示すように、対人的または社会文化的または物理的文脈において発生した〔先行要因〕から〔動機〕が生じ、行動や脳の活動などに〔表出〕し、遂行や達成といった生活の変化を起こす〔結果〕を伴い、それが〔先行要因〕にフィードバックされて動機づけのプロセスが循環する (上淵2019)。

日本国内の多文化コミュニティにおいて、ホスト側である日本人住民のなかにゲスト側である外国人住民とコミュニケーションを維持する循環的な動機付けのプロセスが生まれると、統合型の多文化共生社会に一步近づくと考えられる。すでに外国人住民と日常的にコミュニケーションを取る日本人支援者は、外国人住民とのコミュニケーションをとる循環的な動機付けのプロセスができており、彼らの動機付けのプロセスを詳細に分析すれば、ひとりの住民が支援者になるまでの文化受容の変化の事例を記述することができるだろう。

(2) 異文化感受性発達モデル (the Developmental Model of Intercultural Sensitivity)

Bennett (1986) が提示した異文化感受性発達モデル (以下、DMIS) は、人が異文化に対してどのように反応し、文化受容や統合に至るかを6つのステージに分けてスケール化している (図3)。

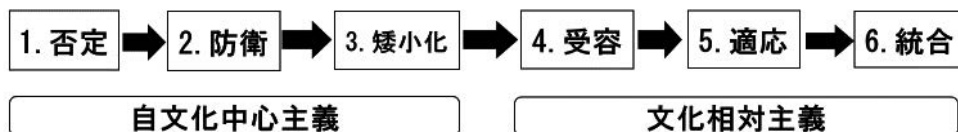


図3 異文化感受性発達モデル (Bennett 1986:182の図をもとに筆者が翻訳・作成)

DMISによると、人は異文化に接したとき物理的または社会的に遠ざかる〈否定 (denial)〉の反応を示し、続いて異質なものを軽視する〈防衛 (defense)〉、文化的差異を小さな問題として捉える〈矮小化 (minimization)〉と変容する。ここまでの3つの反応は自文化中心主義 (ethnocentrism) の場合

に起こるものである。そして、文化相対主義（ethnorelativism）にあてはまる反応は、異文化を認めて尊重する〈受容（acceptance）〉、異なる文化の行動や思考と調和し、共感する〈適応（adaptation）〉、各個人のアイデンティティを文化相対主義にあてはめて考える〈統合（integration）〉の3つである。Berryの「文化受容態度」にも〈統合〉の語が用いられているが、「自文化の特徴や文化的アイデンティティの維持」と「ホスト側の社会との関係維持」を重視するというゲスト側の態度を示したものである。しかし、DMISは異文化に接したときの反応をスケール化してゲスト側とホスト側の双方に用いることができる点で、Berryの「文化受容態度」にある〈統合〉とは対象の範囲が異なり、かつ異文化への反応の変化を表すこともできる。本稿はホスト側である日本人支援者を調査対象とするためDMISを理論的枠組みとし、調査対象者の動機付けプロセスがDMISのどのステージにあてはまるのかを検討して異文化への反応が変化した過程を明らかにしたい。

尚、桜木（2013:169-170）は「自文化を自然かつ合理的な唯一の視点とする」のが自文化中心主義、「文化によって異なる視点を認識かつ尊重する」のが文化相対主義だと説明する。本稿は自文化中心主義と文化相対主義について桜木の定義に基づいて論じる。

3. 調査

(1) 調査対象

ワラビスタンの川口市側における主要なクルド人支援の場と日本人支援者は下記のとおりである。

- ①クルド人向け日本語教室（主宰者1名およびボランティア教師約10名）
- ②クルド手芸教室（運営者1名）
- ③クルド料理教室（運営者1名・②と同一人物）
- ④クルド人支援を行うブックカフェ（店主およびスタッフ）

①の日本語教室は日本人主宰者1名が入れ替わりの激しいボランティア教師約10名とともに支援活動を行っている。②の手芸教室は日本人運営者1名が教室の開催によって日本人参加者とクルド人のボランティア教師との交流の場を提供している。③の料理教室の主催はクルド人の互助会であるクルド文化協会（3-3参照）だが、公民館の調理室を借りる手続きなど実際の運営は日本人運営者（②の運営者と同一人物）が担う。④のブックカフェの店主および店のスタッフはイベント開催等でクルド人を支援する。このほか蕨市側にも支援グループがあり、大学生などによる交流を目的とした支援グループも存在するが、支援に至った動機付けの経年変化を観察するため、数年にわたり継続して支援を続けている川口市側の下記2名の日本人支援者を調査対象とし、インタビューを行った。

表2 調査対象者

VF1	VF2
クルド人向け日本語教室主宰	クルド手芸教室運営
60代、女性	60代、女性

VF1は川口市内の公民館で週1回、週末の午後にクルド人向け日本語教室を主宰するほか、週1回、平日の夜に他の支援者が経営する市内のブックカフェでクルド人を対象に日本語支援及び学習支援を行っている。どちらの活動も毎回市内外から参加するボランティアが複数名関わっている。週末の日本語教室には主に幼児から中学生くらいまでのクルド人の子どもと、その親世代の成人女性が参加している。平日夜のブックカフェでの日本語支援・学習支援には、中学生から成人（男性）が通う。

VF2は川口市内のブックカフェを会場に、クルド人の伝統刺繍‘オヤ’の教室を主宰している。ボランティアで講師を務めるのはクルド人の成人女性2名であり、VF2はSNSを使った受講生の募集や使用する材料の手配など教室の運営を行っている。

(2) 調査方法

調査対象者に対し、クルド人支援をするにいたったきっかけや現在の支援の状況、支援者から見たクルド人の生活や地域社会とのかかわりなどについて自由に語ってもらい、適宜筆者が質問をばさんだ。インタビューはICレコーダーで録音し、録音時間はVF1が37分、VF2が65分であった。録音したインタビュー内容のトランスクリプトと筆者のフィールドノーツから調査対象者の発言を抽出し、桜井(2005)のライフストーリー研究の手法を援用して記述される。

(3) VF1：日本語教室開設から現在に至るまで—クルド人の生活と日本人の態度—

(3-1) 調査概要

本調査は2019年2月2日、川口市内の公民館で行った。この日は毎週土曜日の午後にVF1が公民館の会議室を借りて開いているクルド人対象の日本語教室があり、教室終了後、会議室に残ってVF1のインタビューを収録した。本稿ではこの日のインタビューのトランスクリプトと、筆者が2018年4月からのべ2年以上にわたって月に2～3回日本語教室に通い、日本語支援や学習支援を手伝いながら教室を観察記録しているフィールドノーツ、その他の資料をもとに記述する。

(3-2) 日本語教室について

日本語教室は、ほぼ毎週通ってくる親子のほか、ときどき参加する子ども(主に小学生)、数回参加したのち来なくなる大人と子どもなど参加者の入れ替わりが激しく、毎週、クルド人の参加人数がまったく予測できない状況のまま続けられている。ボランティアの参加も同様であり、教室を主宰するVF1はクルド人参加者とボランティアの人数のアンバランスの対応に苦慮しているようすが観察される。通例は公民館の定員20名の会議室または和室1室を使用しているが、年度の変り目や夏休み終盤などの生活支援と学習支援の需要が高まる時期は2室予約している。しかし、こうした時期は日本人ボランティアも家庭の用事や大学休暇中の旅行等のために日本語教室に来ない人が多い。VF1は子どもの日本語レベルやそれに伴う学習進捗の格差、各家庭ごとに違う生活支援の内容を考えると、クルド人1～2人にボランティアがひとりついて支援するのが望ましいと考えているが、つねにボランティアの人数が不足気味のため、実現は難しい。

(3-3) 日本語教室開設のきっかけ

はじめたきっかけは、クルド文化協会¹さんがホームページで、えーとー、ボランティアの日本語教えてくれる、くださるかたを募集って書いてあったのを見て、えーと、メールで返事したら、はい、じゃ、すぐお願いしますというのがきっかけだったんですが、えと、クルド文化協会さんのところでは4カ月ほどやって、えーと、教室が終わりになってしまったので、えーとー、わたしがひとりで公民館に場所を移して再スタートしようと思って、えーと、こちらで予約をして、えーと、学習したいかたを、ぼーっと待っているという、そういうスタートです。(20190202:4 インタビュー)²

クルド文化協会(2013年設立)はワラビスタンに事務所を構えるクルド人の互助会組織である。日本人との交流やクルド人コミュニティの互助、クルド人やクルディスタンにかかわる社会的政治的活動などを目的に設立された。寄付によって運営されており、毎年3月にネウロズと呼ばれるクルド民族の祭りを行ったり、料理教室や日本語教室の開催を行ってきた(2020年10月現在は新型コロナの影響で主な活動はすべて休止している)。しかし、VF1が上記インタビューで触れている「教室」は2015年10月に開始後、協会が賃貸しているビルオーナーとの契約上の事情により2016年2月に閉鎖された。VF1は定期的に「教室」に日本語を学びに来ていたクルド人学習者のために、2016年5月、

¹ 一般社団法人日本クルド文化協会 <https://www.facebook.com/nihonkurdish> (2020年6月20日)

² ()内は(調査年月日:発話No.または項目 調査または資料名)

新たに公民館の会議室を借りて独自にクルド日本語教室を立ちあげる。

VF1の日本語教室には、ときおり多文化共生について卒論・修論を執筆する大学生や大学院生のほか、新聞や通信社の記者等が訪れ、VF1にインタビューを行う。その際に日本語教室を開設したきっかけを質問されるとVF1は上記の内容を語る。さらに、ワラビスタン周辺には芝園団地の中国人集住エリアも存在するが(大島2019)、なぜ他の外国人ではなくクルド人に日本語を教えようと思ったかという質問には「クルド人がまわりにたくさんいたから」「言葉に興味があった。教えてみようかな」(20180407:メモ フィールドノーツ)と答え、ワラビスタンにおけるクルド人住民数への気づきとVF1自身の言葉への関心を理由にあげている。

ボランティアの日本語教師から日本語教室開設にいたるまでのVF1の動機付けを前章(1)の図2「循環的な動機づけのプロセス」にあてはめると次のようになる。

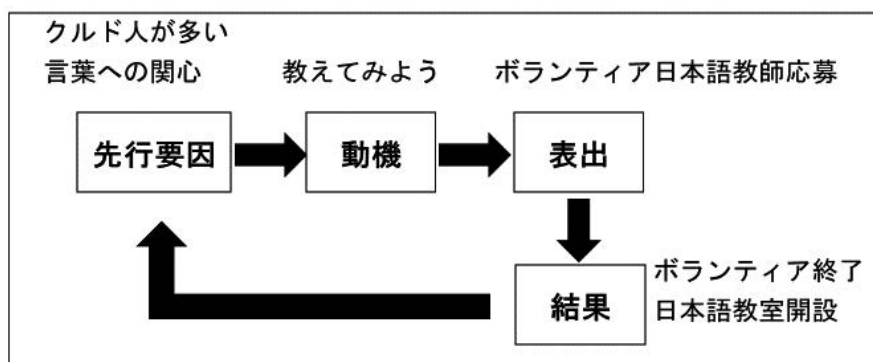


図4 VF1の循環的な動機付けプロセス①

KF1が居住するワラビスタンにおけるクルド人の多さとKF1自身の言葉への関心という[先行要因]が存在し、ボランティア日本語教師の募集を見て「教えてみようかな」という[動機]が発生する。それは実際にボランティア日本語教師に応募するという行動として[表出]し、4カ月でボランティアが終了したことから、2015年にKF1独自の日本語教室開設という[結果]が生じている。そして、これが次項に示す新たなプロセスを生んでいる。

(3-4) 日本語教室開設後

えーと、最初はとても少なく、学習するかたが、その文化協会さんで知りあった2、3人とか、多くても5、6人くらい大人の女性だったんですけど、その人たちも1、2回来て、たぶんつまらないと思ったらしく、さっぱり来なくなったりしたので、ほんとうにひとりふたりの学習者と教えて、やっているうちに、その、小学生のお子さんがあるお母さんがいて、子どもの勉強もこっちで見てくれないかって言われたので、いいですよーって、宿題を持ってきてくださいって言ったら、だんだん、そこから小学生が増えてきて、で、口コミで、子どもの勉強が心配だっていうクルドのお母さんたちに、ここで勉強させてるお母さんが、土曜日の日本語教室に行けば、子どもの勉強見てくれるよっていうことが、こう、話が広まって、わんさか子どもが来るようになったっていう感じですかね。(20190202:6 インタビュー)

2015年に公民館の会議室を借りて始めたクルド人向け日本語教室は、当初は2～6人程度の少人数の大人が利用していたが、やがて利用者が1～2人に減る。その後、子どもを持つクルド人女性に頼まれて小学生の学習支援をするようになり、筆者が初めて日本語教室を見学した2018年4月にはすでに小学生が「わんさか」来ていた。そうした子どもの利用者の増加は、「ボランティアのスタッフからすると、ちょっとキャパを超え」(20190202:8 インタビュー)るようになった。それに加えて、一時は利用者が1～2人までに減少した成人女性への生活支援が増え、VF1とボランティアの負担

が増していく。

それと、生活支援もやっています、えっと市役所からの手紙とか、クレジットカードの請求の内容がよくわからないとか、えっと水道料金滞納していて、いつまで払って書いてあるんだけど、えっと、緊急なのかそうじゃないのか、は、区別がつかないので、この手紙はなん、なんですかって聞かれて手紙を読んで、えっと、説明するっていうこともとても多いですね。(20190202：26 インタビュー)

はい、そうですね、あと、子どもさんに関しては、その学校からの親に、保護者に向けての手紙、が、まったく読めないの、えっと、親が学校にいかなければならない日はいつか、とか、運動会はいつか、とか、そういうことをあの一、トルコ語に直して書いて、えっと、重要な部分だけこれは絶対にやらなければいけないことだよっていうふうに説明しています。(20190202：28 インタビュー)

こうした生活支援に対して「ひとりが郵便を封筒で10個くらい持って」(20190202：30 インタビュー)きたり、「1カ月ぶりに来たりするお母さんは、1カ月分のお手紙を持ってきたり」(20190202：34 インタビュー)するため、支援が(日本語教室の)「時間内に終わらない」(20190202：30 インタビュー)ことがあるという。

公民館での日本語教室開設後のVF1の循環的な動機付けのプロセスは、次のように図示される。

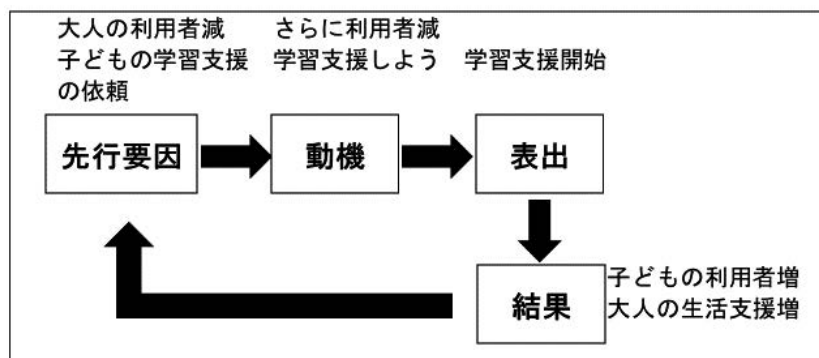


図5 VF1の循環的な動機付けプロセス②

公民館の会議室を借りて大人に日本語を教えはじめたが、利用者が減りはじめ、同時期にクルド人側から子どもの学習支援を依頼されるという「先行要因」を受けて、大人の利用者が1～2人とさらに減っていたこともあり、学習支援をしようという「動機」が生じる。その「動機」が実際に小学生を中心とした子どもたちの学習支援開始の「表出」になり、子どもの学習支援増だけではなく、大人の生活支援増の「結果」に結びつく。そして、この結果は支援側のボランティア不足につながる。

(3-5) 利用者増とボランティア不足の課題

前節で示したように日本語教室で大人を対象とした日本語支援・生活支援だけではなく、子どもの学習支援へと支援内容を拡大したことで利用者が増加し、支援する側のボランティア数の不足が課題となった。川口市内の公民館等で開設されている日本語教室のうち、19教室が市のホームページに教室の開設曜日や利用希望者とボランティア希望者のための連絡先を掲載してもらうなど市からの間接的支援を受けている。しかし、VF1の日本語教室は「行政からは、なんにも支援はないです」(20190202：40 インタビュー)と述べ、その理由を次のように語った。

あの、最初はその川口市のリストに載ってたんですけども、あるとき、ここの日本語教室はクルド日本語教室という名前なので、えー、で、いらっしやる方もクルド人、全員クルド人なんですけど、えーと、市役所の方に子どもの、ここの日本語教室はほかの国の方は受け入れ可能ですかって聞かれて、えーとー、ま、わたしの作ってる資料とかがトルコ語のクルドの人向けに作っていたり、後はスタッフがぎりぎりなので、これ以上ほかの中国の方とかが来てても手が足りなくて、対応が難しいなと思ったので、一応クルドの方限定にしておりますって言ったら、そうするとその、市民全員に対して平等ではないので、えとー、市役所としてはその日本語教室のリストに載せるわけにはいかないんで、外させていただきますっていう説明があって、ああ、わかりました、それだったらしかたないですねっていうことで、えっと、あるときからこのクルド日本語教室は名前が載らないようになりました。(20190202: 44 インタビュー)

VF1のこの語りから、ボランティアスタッフを増やしたいが、クルド人限定の日本語教室であるため市のホームページに掲載してもらおう等の支援を受けられず、ボランティア受付の窓口が限られることがわかる。また、川口市統計書によると、記録がある2005年以降2018年までのデータにおいて、2013年から市内におけるトルコ国籍者の住民数が増え続けている(片山2020a)。そのうちクルド人が占める割合は不明だが、トルコ国籍者の増加とともにクルド人への日本語支援や生活支援、学習支援の需要が高まったと推察される。そこでVF1はさまざまな方法でボランティアの確保を試みる。

このあいだは一、昔中学校の先生をしていた女性、前、生協でいっしょだった人に道でばったり会って、「いま、ひま? いま、ひま?」とか聞いて、えー、ちょっと、こう、ボランティアどう、とか言ったら、ちょっと忙しいって断られたりすることもあるけど、あとは市役所で日本語のボランティアをする学習コースが年に1回くらいあるので、そののだいたい卒業が近いころの時期に、えとー、市役所通して伺って、こういうクルド人の日本語教室もあります、よかったら来てくださっていうアナウンスをしにいったりとか、そういう機会をとらえて、あの一、広めて、ひとりでもふたりでも来てくださるといいなと思ってます。(20190202: 148 インタビュー)

しかし、VF1の試みはいまのところ大きな成功にはつながっていない。考えられる理由を例示してみる。

- ①クルド人支援に関心のある層が少ない
- ②クルド人を無視、または無関心である
- ③ボランティアに関心がない
- ④ボランティアに関心はあるが余裕がない、または都合が合わない
- ⑤クルド人の存在を知らない

仕事や勉強等が忙しく、物理的にボランティアをする余裕がないと感じていたり、クルド人とかかわりたくないと無視をしている層を除くと、支援につながらない背景には、クルド人への無知や無関がある程度存在するだろう。

VF1がボランティアの確保に苦心しながらクルド人を支援する循環的な動機付けのプロセスを以下のように図示する(図6)。

日本語教室の利用者の増加に伴い、日本語支援・学習支援・生活支援の需要が高まった([先行要因])。そこで、ボランティアを増やそうという[動機]が生まれるが、行政の支援が得られないなか「20190202: 148 インタビュー」で述べたようなボランティアの勧誘を試みる([表出])が、思うようにボランティアは増えず、なかなか定着しない([結果])。

図4・5・6で示したVF1の循環的な動機付けプロセス①～③を見てみよう。①の[先行要因]である「クルド人が多い」「言葉への関心」がボランティア終了後に「日本語教室開設」という[結果]

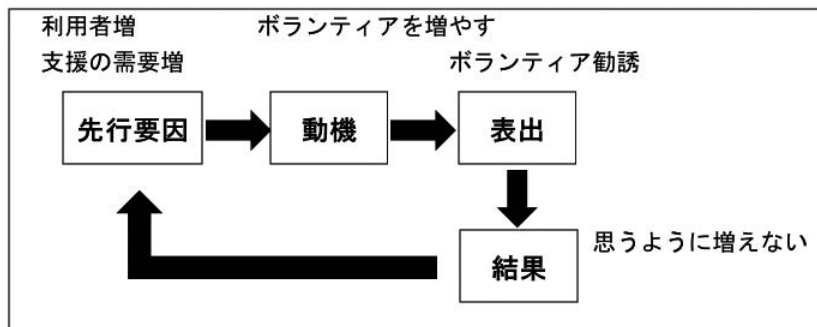


図6 VF1の循環的な動機付けプロセス③

を生んだ。この「結果」が②の「先行要因」である「大人の利用者減」「子どもの学習支援依頼」につながり、「子どもの利用者増」「大人の生活支援増」という「結果」につながった。まさにVF1の動機付けプロセスが循環している。しかし、②の「結果」、「利用者増」「支援の需要増」の「先行要因」からボランティアを増やそうとする「動機」は生まれたものの、「ボランティア勧誘」という具体的な行動の「表出」がボランティア増にはつながっていない。

日本語教室の活動についてSNSでの発信も続けるなどクルド人支援の日本語教室について社会に知らせる努力をしていますが、ボランティア不足問題の根本的な解決には、日本人住民側の無知や無関心、恐怖心、嫌悪感といった態度や感情がカギになることを指摘している。

やっぱりクルド人に対してあまり抵抗がなく、外国人に対してあま、偏見がすごく少ない人しか、ここには来ないので、えーと、もともともう挨拶もしたくない、あの人たちなんで日本にずっといるのかねって、そういう嫌な気持ちを持っている人は、ボランティアとしてはここには来ないので、ちょっと人数が少ないかなーと思ってます。(20190202:144 インタビュー)

あの、たとえば、ご町内がいっしょでゴミ置き場がいっしょで、あさごみ出ししたら、ああ、おはようございますっていう日本人だったら会話しますが、たぶんクルドの人にはおはようございますって言って、くれない日本人が多かったりとか、その日本語がわかるかどうかが外見から想像できないので、話しかけられることもない、っていうことがすごく多いし、あの、ちょっと中東風な顔立ちの男の人も女の人も、日本人の中でわたしの知りあいでもみんな怖いっていうイメージが先に立っていて、敢えて知りあいになる必要もなければ、声もかけたくないっていう人がすごく多かったです(20190202:128 インタビュー)

(3-6) VF1のクルド人に対する異文化受容

筆者ののべ2年以上に及ぶフィールドワークのあいだ、VF1がクルド人への支援の需要増とそれに伴うボランティア不足の問題解決に奔走するようすが観察された。特別在留許可を求める訴訟を起こしたクルド人家族の裁判の傍聴や、来日1年で日本の高校への入学を目指す10代のクルド人の受験勉強と受験先検討の支援など(20200306:メモ フィールドノーツ)、VF1の支援内容は時間を追って広範囲に及んでいった。VF1はそうしたクルド人への支援に力を注ぐ動機について多くを語らないが、いくつかヒントになる語りが記録されている。

やっぱり外国人が日本に滞在するためには、在留するためのビザが必要だという法律があるので、えーと、その何割かビザがないけども日本にいないといけない理由があって、日本にいる方たちは、えーと、まず、住民票がないのと、えーと、健康、国民健康保険に入れない、年金にもいちおう入れないので、えーと、そういうソーシャル・セキュリティの恩恵を受けることができないまま日本に滞在して生活してるっていうのが金銭的にもたいへんだなって思います。(20190202:50 インタビュー)

ワラビスタンには1990年代から来日したトルコ系クルド人が集住しはじめ、トルコでの差別や迫害等を理由に日本で難民申請をしている。しかし、クルド人の難民申請や在留特別許可を求める裁判を支援する弁護士によると、2020年6月現在、難民認定された人はいない。その結果、多くのトルコ系クルド人は査証を持たず、就労できないなどの制限のある滞在を続けている（20200621：メモ フィールドノート）。「120190202：50」の語りからも、VF1がクルド人が経済的に厳しい状況であり、住民票がないため健康保険や年金にも加入できないことを心配していることがわかる。

また、VF1はクルド人の教育観を「教育に対する考え方がちょっと日本人とは感覚が違うかな、と思っていて、えー、で、簡単に日本語が読み書きできればオッケーだと思ってる親御さんはたくさんいる」（20190202：54 インタビュー）と述べており、そうした教育観の家庭で育つ子どもたちについて次のように語っている。

そうですね、日本、は、えー、ほかの外国に比べて日本語オンリーの国なので、えーと、公用語としても日本語しか、えーと、ないので、日本語ができないと非常に生活に不利だし、情報も集められないですから、子どもたちはえーと、もし日本の小学校に1年生から入れるのであれば、がんばって勉強して、なるべく日本語が理解できるような大人になってほしいな、と、そのほうがやはり、職業の選択の幅も広がるし、その、自分で必要な情報を日本語で集めることができれば、えーと、メリットはすごく多いと思うので、なるだけ努力して日本語ができる大人になってほしい。（20190202：56 インタビュー）

VF1はクルド人の子どもたちが高校・大学への進学率が高いとされる日本で生活するためには「読み書き」レベルでは足りず、将来を見据えた日本語習得の必要性を感じている。その背景には、小学生のときにトルコから来日し、本人の努力と周囲の支援によって日本語を習得して2015年に在日クルド人初の大学生となった女性の事例や、それぞれが大学・短大に進学したクルド人姉妹が裁判を起こした結果、日本での進学を「留学」と扱われる在留特別許可を得た事例があるだろう（鶴沢2019、中島2019）。

では、本章3節で記述したVF1の語りと循環的な動機付けのプロセス、20190202：50、56での語りから動機付けや行動、態度を抽出してVF1の異文化受容についてBennettの異文化感受性発達モデル（DMIS）に沿って示してみよう（図7）。

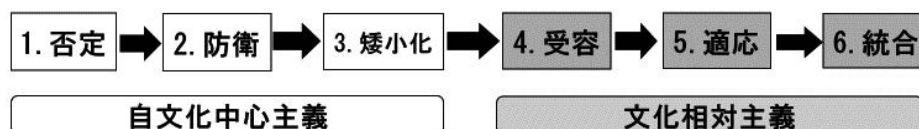


図7 VF1の異文化感受性発達モデル（Bennett 1986）を基に筆者が作成

循環的な動機付けプロセス①でワラビスタンにクルド人が多いことや、言葉への関心から、自ら進んでクルド人対象のボランティア日本語教師に応募した時点で、VF1の異文化感受性発達モデルは図7の塗りつぶしで示すように、文化相対主義の〈受容〉反応を示す「異文化に対する純粋な興味」（桜木2013:172）から始まっている。

日本人住民のクルド人への偏見、無視、拒否をする態度を批判した「20190202：128、144」の語りではどうだろうか。このVF1自身がクルド人の習慣や考え方を受け入れていることを誇示する代わりに、日本人のクルド人に対する偏見、無視、拒否といった態度を批判することで、ワラビスタンのマジョリティである日本人住民が「他者の文化的行動様式や世界観を自分のものとして取り込む能力を身につける」（桜木2013）〈適応〉段階にないことを述べ、自身が〈適応〉段階にあることを逆説的に示している。

また、「日本語ができないと非常に生活に不利だし、情報も集められない」し、子どもの将来を考えると「なるだけ努力して日本語ができるようになってほしい」としつつも、「ただ、あの母語を忘れてはほしくないの、え、両方（日本語とトルコ語）がんばってほしいんですけど」（いずれも

20190202:56 インタビュー) という発言は、異文化の視点を捉えて尊重する「文化相対主義」の最終段階である〈統合〉の反応にあてはまる。VF1がクルド人の支援に力を注ぐ背景には、こうした異文化を〈受容〉、〈適応〉して、「文化相対主義」のもっとも進んだ段階である〈統合〉反応に達しているからだと言える(図7 右側の着色部分)。

VF1が異文化であるクルド人に対して〈否定〉〈防衛〉〈矮小化〉といった自文化中心主義の反応を示さなかったことについて、VF1は外国語に関心があることと、海外旅行先で地元の人に親切にしてもらった経験のせいではないかと自己分析する。大勢のクルド人が身近にいることに気づいたのも、VF1が夜にランニングしていた公園に、聞いたことのない外国語を話す男性がよく数人で集まって話している場面を見かけていたことが始まりだったという。彼らはクルド人であると知人から聞き、「クルド」でネット検索をしてクルド文化協会のサイトにたどり着いて、クルド人に日本語を教えるようになった(20201003:メモ フィールドノート)。こうしたVF1の行動をVF1自身は異文化への関心に加えて「ようするにわたしはおせっかいなのだ」(20201003:メモ フィールドノート)と分析しているが、VF1が語る内容はワラビスタンのような多文化コミュニティで新たな支援者を掘り起こすヒントとなるのではないだろうか。

(3-7) 日本語教室の課題

VF1のクルド人に対する関心や行動と循環的な動機付けプロセスの流れを時系列に沿って一覧にすると表3のようになる。

表3 VF1の関心・行動と循環的な動機付けプロセスの流れ

時期	VF1の関心・行動	循環的な動機付けプロセスの流れ
	外国語や異文化への関心	図4 [先行要因]
2015年頃	身近にクルド人が多いことへの気づき	図4 [先行要因]
2015年	クルド文化協会日本語教室のボランティア教師募集を見つけ、教えてみようと思いつ	図4 [動機]
	ボランティア日本語教師応募	図4 [表出]
2015年10月～	日本語を教えるはじめる	
2016年2月	教室の閉鎖	図4 [結果]
2016年5月	公民館でクルド日本語教室開設	図4 [結果]
	大人の利用者減 子どもへの学習支援の依頼	図5 [先行要因]
	大人の利用者がさらに減る	図5 [動機]
	子どもの学習支援開始	図5 [表出]
	子どもの利用者増 大人の生活支援増	図5 [結果]
	支援の需要増	図6 [先行要因]
	ボランティアを増やす	図6 [動機]
	ボランティア勧誘	図6 [表出]
	思うように増えない	図6 [結果]

日本語教室を続けていくうえで安定したボランティアの確保は欠かせないが、現状は卒業して就職したらボランティアを辞める大学生が主体であり、ワラビスタン周辺の地域住民のなかからボランティアを集めることは困難である。そのため、VF1は当面は大学生などのボランティアの協力を得ながら自分の目が届く範囲で支援を続けている。

また、VF1はクルド人側の日本語習得について、日本語力不足や学歴不足が彼らの将来をより狭

めてしまうことや、それにより生まれる格差が日本社会のマイナス要素になることを危惧している。

たぶん収入がふつうのホワイト系サラリーマンに比べたら、年取は少ないと思うので、肉体労働をずっと続けていて、そうすると、その一、収入格差とか、生活レベルの格差とか、えー、代々ずっと受け継がれてしまうと、えーと、たぶん不満が溜まっていく、外国人としての不満が溜まっていくのではないかって、自分たちだけ、なぜこんな冷たく、冷たい社会に生きていかなければいけないのかっていう気持ちももしかしたらずっと溜まっていってしまうと、えーと、日本社会の中では、その、すごくマイナス要素になっていくと思うので、ほかのクルドの方に限らず、ほかの国の人たちも、もし日本に定住したとしても、その収入がすごく低いことで、格差がずっと生まれていくとヨーロッパの人たちがいろいろ、いまたいへんなことになっている、ニュースを聞いて、同じことが日本にも起きるのではないかっていう心配がありますけど。(20190202:150 インタビュー)

VF1の心配をできるだけ回避するには、日本語習得や進学に意欲のあるクルド人を支援する継続的な活動が欠かせない。公的支援が望めない現状では、VF1の活動に賛成して共に行動する地域の日本人ボランティアをひとりでも多く確保することが重要だろう。

(4) VF2：料理教室の参加者から手芸教室開設へ

(4-1) 調査概要

2019年2月5日、川口市内のブックカフェでVF2にインタビューを行った。ブックカフェはワラビスタンの中心であるJR蕨駅から徒歩数分の場所にあり、しばしばクルド人支援や異文化理解を促すことを目的としたイベントが開催される場所である。本稿ではインタビューを書き起こしたトランスクリプトをもとにVF2のクルド人支援にかかわる動機付けと異文化受容について記述したい。

(4-2) 手芸教室について

調査対象のVF2が運営するクルド手芸教室はインタビューを行ったブックカフェを会場にして月に1～3回程度、火曜日に開催され、クルド人の一般家庭で作られるお菓子を食べながらクルド民族の伝統刺繍オヤを体験する場である。講師はクルド人女性ボランティアが務める。調査を行った時点では講師の女性の日本語の習得が進んでいなかったため、教室では片言の日本語とトルコ語、手振りで教室が開かれていた。VF2はSNSを活用した参加者の募集や使用する材料の手配など教室の運営を行い、教室開催中は講師と参加者のあいだに入って講師の意図を参加者に伝えたりして、参加者が時間内にアクセサリーなどの小品をひとつ作成して持ち帰れるようサポートする。

(4-3) クルド人に関心を持ったきっかけ

えーと、でもいちばん最初にクルドの人に対してあの人なに？と思ったのは、えーと、いちばん最初は、娘が帰宅時にコンビニの前にいる若いクルドの男の子たちから声をかけられるのが怖いから迎えにきてくれてって言われたところからですね。

あの人たちいったい何なんだろうっていうところで、実はクルド人で、国を持たない人たちで、たいへんなんだ、国に帰れなくてっていうところからですね。(20190205:20 インタビュー)

VF1のクルド人に対する関心は、VF1の娘が「クルドの男の子たちから声をかけられるのが怖いから迎えにきて」と言われた瞬間から始まっている。これをきっかけに「あの人たちいったい何なんだろう」と思い、クルド人にかんする知識を求めようになったという。

知らないで文句いっててもしょうがないなっていうところで、いったい何者なんだろうっていう興味を持ったっていうところから始まりましたね。(20190205:24 インタビュー)

クルド人に対して「文句いっててもしょうがないなって」と述べているように、母親として、おそ

らく初めは少し彼らを警戒したと思われるが、娘の一件をきっかけにクルド人の存在を強く意識し、彼らは何者であるのかを知りたいと思いはじめたのだろう。ただし、VF2は次のようにも述べている。

だからいちばん最初から、あの人たちをどうにかして助けてあげようなんて思っていたわけではないです。(20190205 : 20 インタビュー)

娘に怖い思いをさせた相手を否定したり無視したりするのではなく、それまでの無知・無関心を改めて自ら彼らについて知ることに意識を向けたことが明示されている。

VF2がクルド人に関心を持ったきっかけについて、循環的な動機付けのプロセスの図で示すと次のようになる。

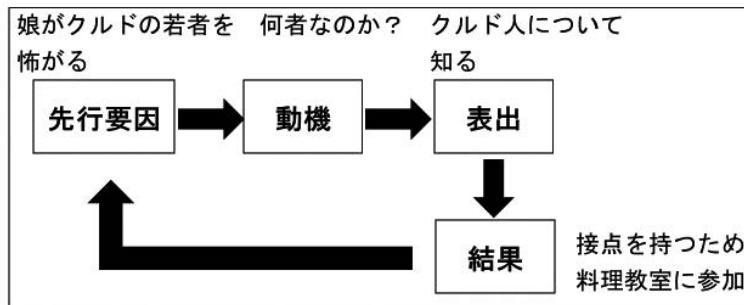


図8 VF2の循環的な動機付けプロセス①

VF2は娘の一件が「先行要因」となってクルド人への関心がわき、「何者なのだろう」という「動機」が生じて、彼らについて知ろうとする「表出」につながる。しかし、日本人コミュニティとの接点が少ない彼らと接触するチャンスは少ない。そこで、2016年秋ごろから公民館等で開かれていたクルド料理教室に通うようになる（「結果」）。

(4-4) 料理教室の参加者からスタッフへ

近隣にたくさんクルドのかたいらっしたので、えーと、どうにか接点を持ちたいなどは思っていたんですが、えーと、何分にもいきなり話しかけるっていうのはばかられて、で、ずっと料理教室のほうも、実は前川公民館、前川南公民館、か——でやったことではあるんですが、気にはなっていたのですが、なかなかその一、日程が合わず、行くことができないでいたんですね。んー、これは、っていう、なんていうの、もうちょっとちゃんと知りあいたいなっていうか、もう少し彼女たちのことを知りたいなっていう思いから、えー、そのころはほぼ毎月料理教室やりましたんで、あの一、欠かさず、参加しておりました。(20190205 : 12 インタビュー)

VF2はクルド人と知りあうために、クルド文化協会が日本人との交流を目的に市内の公民館で開催していたクルド料理教室に通いはじめる。料理教室は公民館の調理室（定員25名）で5～7人のクルド人の女性たちが料理をつくり、20人弱の参加者がその手伝いをして、最後にできあがったものをみんなで食べるという流れで行われていた。参加者はクルド人について卒業論文を書いている大学生や、リピーターに誘われてきた人、偶然参加者募集の案内を見た人などさまざま、ワラビスタンの地域住民以外の参加者が一定数を占めていた。VF2は何度か参加するうちに料理教室の日本人スタッフだった女性が辞めることになり、その後任として2017年5月からVF2が料理教室の日本人スタッフになる。

料理教室の一参加者からスタッフになったことで、料理教室の講師のクルド人女性たちとの接点が増え、「根掘り葉掘り聞く」（20190205 : 24 インタビュー）うちに、最初はよく知らない日本人に自分たちについて話すことを警戒していたクルド人たちが、少しずつ打ち解けて話すようになった。こ

の時期の VF 2 の循環的な動機付けプロセスを下図に示す。

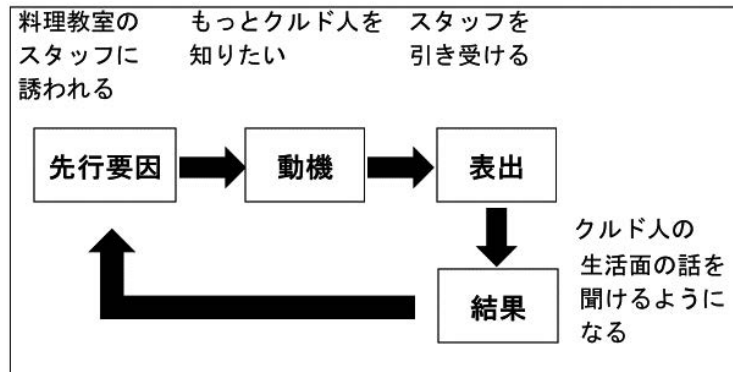


図9 VF2の循環的な動機付けプロセス②

クルド料理教室の会場予約などを引き受けていた日本人スタッフが教室をやめたため、教室に毎回参加していた VF 2 が後任のスタッフにならないかと誘われる（[先行要因]）。当初から料理教室の参加目的がクルド人と接触を持ち、彼らについてもっと知りたいという [動機] があったため、VF 2 は誘いを受け入れて料理教室のスタッフとなる。その時点ですでに講師のクルド人女性たちとは顔見知りになっていたと推察され、やがて VF 2 はクルド人からトルコを脱出して日本で難民申請をする彼らの暮らしについて話をきける（[結果]）ようになり、当初の目的を達成する。

（4-5）手芸教室の運営

えーとー、そんな感じでやっている料理教室が冬場寒いので、料理教室を開かないことになってます。（20190205：82 インタビュー）

でも、開かない期間、なんの接点もなくなるわけですよ。

あの、彼女たちと、その一般の日本人と。（20190205：84 インタビュー）

クルド料理教室の会場である公民館の調理室は空調が設置されておらず、真冬の利用は厳しい会場だったため、冬期間は教室を開催しないことになっており、その間、教室の講師を務めるクルド人女性たちと参加者である一般の日本人との接点が失われてしまうことになった。

一方、講師を務めるクルド人女性たちはトルコから逃れて来日し、制限の多い不自由な暮らしをしている窮状を「なるべく日本人の人に知ってほしい」（20190205：80 インタビュー）という考えがあった。こうしたクルド人側の要望を踏まえ、VF 2 はクルド人の伝統刺繍オヤを伝える手芸教室の通年開催を発案する。手芸教室を立ちあげた当初は会場にしていた公民館が駅から徒歩15分ほどとやや遠かったため定員10名の参加者集めに苦勞することもあったが、駅から徒歩5分程度のブックカフェに会場を移してからは定員6名が毎回ほぼ満席状態である。尚、2020年の新型コロナ拡大により、4月から5月の手芸教室休会の時期を経て、6月からは感染対策のため定員を4名に減らして教室を再開している。

手芸教室設立当初は講師の手芸技術にばらつきがあったため、回を重ねるうちに技術の高いふたりのクルド人女性にボランティア講師を頼むようになった。そのふたりのクルド人女性は手芸教室で教えるようになってから「変わった」と VF 2 は語る。

えーと、オヤの先生ふたりはだいぶ変わられました。(20190205：104 インタビュー)

たとえば、えっとー、いまあまり日本語はお話しになりませんが、ぜんぜん日本語しゃべれないおふたりだったんですね。(20190205：106 インタビュー)

で、ここでも手芸用語、日本語を覚えようとしてくださってますね。(20190205:112 インタビュー)

あの一、教えるためには日本語が必要なんだということを感じていただいているようで、日本語勉強するっておっしゃるんですね、お二人とも。(20190205：114 インタビュー)

さらに、VF2は講師のひとりには日本語教室に通いはじめ、もうひとりの講師の子どもからは母親が自宅で「夜お父さんといっしょにお勉強しているんだよ」(20190205：114 インタビュー)と聞いたと語る。そして、嬉しいことに、講師をするようになってから、ふたりの女性の表情が変わったと語る。

あとね、笑顔が増えたのがすごい嬉しいんですよ。(20190205：118 インタビュー)

あ、おひとかたはね、もともとわりとあの一、笑顔の多いかただったんですが、もうおひとかたはほんとにね、笑わ…あんまり笑わないかただったんですよ。(20190205:120 インタビュー)

それがね、最近とてもにこやかでいらっしやるので。(20190205：122 インタビュー)

VF2はそうしたクルド人女性から直接何も言われなくても、女性の子どもの「ママ、すごく感謝してる」と聞かされて、「よかったー」と思っていると語った(20190205：130 インタビュー)。そして、女性たちに変化が見られた理由として、「日本人との、この、なんだろ、接点を持つようになって、ちょ、ちょっとは壁がなくなってきたのかなあ」(20190205：124 インタビュー)と分析する。

冬期の料理教室休会に始まるVF2の循環的動機付けプロセスを以下に図示する。

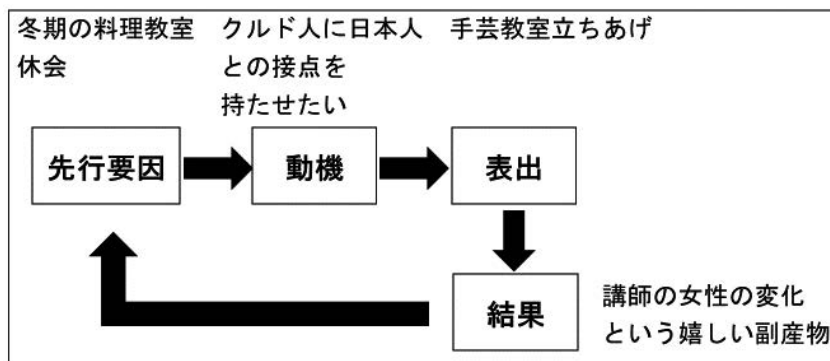


図10 VF2の循環的な動機付けプロセス③

会場設備の都合による冬期の料理教室休会³という「先行要因」が発生していたが、そのころは料理教室講師のクルド人女性たちが自分たちの窮状を日本人に知ってもらいたいという希望を持っていることを知っていたため、彼女たちに料理教室休会のあいだも日本人との接点を持たせたいという「動

³ インタビューを行った後、2019年夏前に会場の公民館の空調設備が寒い季節を気にせずに料理教室を開けるようになったが、新型コロナ拡大の影響で2020年10月現在も料理教室は休止中である。

機] が生まれる。そこで市内のブックカフェを会場にしてクルド伝統刺繍を体験する手芸教室を立ちあげた ([表出])。すると、手芸教室講師のふたりの女性たちが日本語習得に熱心になったり、笑顔が増えるという VF2 にとって嬉しい副産物が生じる [結果] が得られた。VF2 の娘がクルド人の若者を怖がった一件をきっかけに、彼らが「何者なのか」を知るという動機で始まった VF2 の目的は果たせたと考えていいだろう。

(4-6) VF2のクルド人に対する異文化受容

娘からクルド人の若者に声をかけられて怖いから迎えにきてと言われた日まで、VF2 にはクルド人に対する明確な関心も知識もなかった。しかし、娘の一件をきっかけに VF2 は「知らないで文句いってもしかたがないなって」考え、クルド人との接触を求めてクルド料理教室に通うようになる。クルド人に対して関心も知識もないというスタート地点は平凡だが、クルド人に関心を持ってからの行動力により、クルド人と接触して、もっと知りたいという目的は達成された。VF2 の異文化感受性発達モデルを下図に示す。

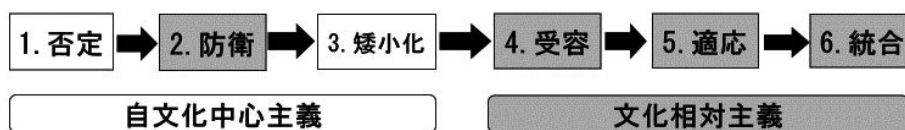


図11 VF2の異文化感受性発達モデル (Bennett 1986) を基に筆者が作成

VF2 の語りからは、娘の一件以前にクルド人への明確な関心や知識があったとは観察できない。怖がる娘を迎えにいったときはクルド人に対して「文句」を言いたくなるような〈防衛〉反応が生じたかもしれないが、その後、VF2 はクルド人について知りたいと考えるようになり (〈受容〉)、自文化中心主義から文化相対主義に転じている。そして、冬期間に料理教室が休会になることでクルド人たちが日本人との接触チャンスがなくなるため、自分たちの窮状を日本人に知ってもらいたいというクルド人たちの希望を汲み、手芸教室を立ちあげる。クルド人たちの立場に立った行動を実行に移した〈適応〉反応と言えるだろう。

さらに VF2 は手芸教室の講師が中心になって製作した伝統刺繍オヤの作品を販売するため、「合同会社を立ちあげ」(20190205:388 インタビュー) たという。会社からのオヤ作品の製作発注によって、クルド人にとっては一定の収入源になる。また、彼女たちに「やることがある」環境をつくらうとするのは、ワラビスタンに集住しているとはいえ、この地域全体のなかではマイノリティであるクルド人の文化や生活、アイデンティティを維持することに共感する〈統合〉反応だと言えるだろう。

(4-7) 手芸教室の課題

VF2 のクルド人に対する関心や行動と循環的な動機付けプロセスの流れを時系列に沿って一覧にすると表4のようになる。

表4 VF2の関心・行動と循環的な動機付けプロセスの流れ

時期	VF2の関心・行動	循環的な動機付けプロセスの流れ
	娘がクルドの若者を怖がる	図8 [先行要因]
	クルド人への関心「何者なのか？」	図8 [動機]
	クルド人について情報を集めて知る	図8 [表出]
2016年9月頃～	接点を持つため料理教室に参加	図8 [結果]
	料理教室のスタッフに誘われる	図9 [先行要因]
	「もっとクルド人を知りたい」	図9 [動機]
2017年5月	スタッフを引き受ける	図9 [表出]

	クルド人の生活面の話を聞けるようになる	図9 [結果]
	冬期の料理教室休会	図10 [先行要因]
	クルド人に日本人との接点を持たせたい	図10 [動機]
2018年1月	手芸教室立ちあげ	図10 [表出]
	講師のクルド女性の変化を観察する	図10 [結果]

VF2はしばしば海外旅行をして現地の人々と交流することを好む。このようにもともと異文化に関心があったことでクルド人にも関心が向き、日本人にクルド人との接触場面を持たせながらクルド人を支援する活動に結びついたと考えられる。

現状は手芸教室の運営はVF2がひとりで担っており、オヤ技術が高くボランティア教師をできるクルド人女性は、いまのところ2名である。教室の参加者のなかにはオヤ作品づくりとクルドのおやつを楽しみに教室に参加するリピーターもいるというが、会場のブックカフェのスペースの問題や新型コロナウイルス感染対策等を考えると、手芸教室の規模を拡大することは難しい。しかし、クルド人側に日本語習得の意欲の高まりや、ボランティア教師として日本人にオヤを教えることに生きがいを見いだしていることが観察されており、この手芸教室のような接触の機会が増えることがクルド人と日本人の双方にとってプラスになるといえる。

4. 考察

VF1はワラビスタンにクルド人が多いという気づきや自分自身の言葉への関心という [先行要因] をスタート地点として、ボランティア日本語教師への応募、日本語教室開設、支援内容と量の増加・拡大と、段階を踏みながらクルド人との関わりや支援を強く行ってきた。VF1の循環的な動機付けプロセスに一貫して見られるのは、学習支援を依頼されれば、まずは受け入れる、ボランティアが不足していれば確保するためにやれることを探す前向きな姿勢である。VF2は最初はクルド人に「文句」を言いたくなるような感情を抱いた可能性があるが、何も知識を持っていないのに彼らを批判することを自分自身で制御し、クルド人と接触し、彼らについてよく知ることを選んだ。

VF1とVF2には共通して [先行要因] に積極的に関わり、生じた [動機] に対して何らかの行動を起こす [表出] を行い、[結果] を出すというポジティブな循環が観察された。

動機付けには「接近・回避動機付け」理論がある。村山 (2012) によると、「接近動機付け」とは食事や金銭、他者からの評価といった「ポジティブな刺激に接近しようとする」動機付け。また、「回避動機付け」とは電気ショックや金銭の損失のように「ネガティブな刺激を回避しようとする動機付け」を意味する。

VF1とVF2の動機付けは、クルド人に接触して支援するという「刺激」を「ポジティブ」に捉えている点が共通している。VF1が語りのなかで述べたように、「中東風な顔立ちの男の人も女の人も、日本人の中でわたしの知りあいでもみんな怖いというイメージが先に立っていて、取って知らなければ、声もかけたくないという人がすごく多かったり」(20190202:128) といった異文化の人を外見や先入観だけで判断することはない。むしろ、周囲の日本人がネガティブな刺激と捉えて回避動機付けを選択する対象をよく知ろうと務め、ひとつのコミュニティのなかで互いがいかに暮らしていけるかを考え、行動しようとしている。多様化する地域社会にとって、こうした姿勢の住民が増えることがもっとも確実に多文化共生社会の構築につながるだろう。

5. まとめ

本稿はワラビスタンでトルコ系クルド人を支える日本人支援者へのインタビューを中心に、著者の2年以上にわたる日本語教室でのフィールドワークによるデータの一部も加えて構成した。調査対象の2名のインタビュー結果だけで査証を持たずに長期滞在を続けるクルド人が集住するワラビスタン

という地域が抱える問題の解決策を明示できるものではないが、「4. 考察」で示したように、クルド人と接点のなかった状態から支援者となった2名には動機付けや異文化受容の観点からいくつかの共通点が観察される。これらの共通点は多様化する日本の地域コミュニティにおいて多文化共生社会を形成するためのヒントになるだろう。

VF1はワラビスタンという地域コミュニティについて、クルド人と日本人が「接点がないまま同じ空間で生活をしている」(20190202:130 インタビュー)と述べて、日本人の異文化受容力が低く、クルド人のホスト側社会への接近が不足していると指摘している。これはわたしたちが多文化共生社会を本気で目指すのであれば、永遠に考え続けなければならない課題である。今後はクルド人と日本人の接触場面を生み出すだけではなく、地域活動や教育などさまざまな機会に日本人住民の異文化受容力を高めることにより目を向けることが必要だろう。そして、日本人住民の異文化受容力が高まり、ゲスト側に関心を持つ人が増えれば、VF1やVF2のようにクルド人支援に関わる人が増え、共生社会の実現に一步近づくのではないだろうか。

参考文献

- 稲垣亮子 (2012) 「日本社会における「多文化間コンピテンス」尺度開発に関する研究ノート—コンピテンスの領域と構成概念妥当性の検討の観点から—」『愛知淑徳大学論集. 交流文化学部篇』2、33-55、愛知淑徳大学交流文化学部
- 上淵寿 (2012) 「動機付けとはなにか」『キーワード 動機づけ心理学』、4-5、金子書房
- 上淵寿 (2019) 「序章 動機づけ研究の省察—動機づけ・再入門—」『新 動機づけ研究の最前線』、1-19、北大路書店
- 稲垣亮子 (2012) 「日本社会における「多文化間コンピテンス」尺度開発に関する研究ノート—コンピテンスの領域と構成概念妥当性の検討の観点から—」『愛知淑徳大学論集. 交流文化学部篇』2、33-55、愛知淑徳大学交流文化学部
- 大島隆 (2019) 『芝園団地に住んでいます:住民の半分が外国人になったとき何が起きるか』(明石書店)
- 鹿毛雅治 (2012) 「序『やる気の心理学』への招待」『モチベーションをまなぶ12の理論』、3-12、金剛出版
- 片山奈緒美 (2018) 「『やさしい日本語』から『わかりあえる日本語』へ:クルド人住民の接触場面形成の可能性と日本語教育が果たす役割」『多言語社会と言語問題シンポジウム2018予稿集』35-36、言語管理研究会 <https://lmtjapan.files.wordpress.com/2018/12/proceedings1.pdf> (2019年1月5日閲覧)
- 片山奈緒美 (2019) 「難民申請者の言語環境に関する研究—在日クルド人の言語バイオグラフィーからの記述の試み—」『日本言語政策学会 第21回研究大会 予稿集』、19-21、日本言語政策学会
- 片山奈緒美 (2020a) 「『わかりあえる日本語』構築のために—クルド人コミュニティでの日本語意識調査から—」『国際日本研究』12号オンライン版、184-197、筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻
- 片山奈緒美 (2020b) 「ワラビスタンにおける『わかりあえる日本語』の動機付け—在日トルコ系クルド人のインタビュー調査から—」『日本語コミュニケーション研究論集』9号、3-14、日本語コミュニケーション研究会
- 桜井厚 (2005) 「第1章 ライフストーリー・インタビューをはじめ」『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』、11-70、せりか書房
- 桜木俊行 (2013) 「第7章 カルチャーショックと適応のプロセス」『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』、159-180、有斐閣
- 総務省 (2006) 「地域における多文化共生推進プラン、https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b6.pdf、(2020年6月19日閲覧)
- 鶴沢哲雄 (2019) 『日本で生きるクルド人』ぶなのもり
- 中島由佳利 (2019) 「49 在日クルド人コミュニティ—黎明期の『ワラビスタン』と第1世代—」『ク

- ルド人を知るための55章』、281-286、明石書店
- 野田尚史 (2014) 「『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ——母語話者が日本語を使うときの問題として——」『日本語教育』158、4-18、日本語教育学会
- ブシャール, ジェラール (2017) 『間文化主義』(丹羽卓監訳)、彩流社 [Bouchard, G. (2012) . L'Interculturalisme: Un point de vue Québécois. Montréal : Editions du Boréal.]
- 村山航 (2012) 「Theory 3 生物の根源的な動機を考える」『モチベーションをまなぶ12の理論』、73-100、金剛出版
- Berry, J.W. (1997) . Immigration, Acculturation, and Adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, 46 (1) , 5-34. doi:10.1111/j.1464-0597.1997.tb01087.x
- Bennett, M. J. (1986) . A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10 (2) , 179-196. Doi:10.1016/0147-1767 (86) 90005- 2
- 川口市「日本語教室」<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01060/020/4/4970.html> (2020年6月20日閲覧)